

令和2年度鳥取県教育研究大会代替の開催概要について

令和3年2月10日
小中学校課

1 趣旨

県教育委員会では、例年、鳥取県の「教育に関する大綱」に掲げる取組方針を踏まえ、全体講演、各校種における実践事例の発表等をとおして、県内の幼児・児童・生徒の学びの質の向上、豊かな人間性や社会性の育成、安全で安心して通える園（所）、学校づくりの一層の推進を図ることを目的に、鳥取県教育研究大会を実施しているが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点並びに今後の鳥取県のGIGAスクール構想の実現に向けた取組を示すため、集合しての実施ではなく、動画を配信し、各学校等で視聴する形で実施した。

【目的】

令和時代のスタンダードな学校像として、義務教育段階では全国一律のICT環境整備が行われ、多様な子どもたちを誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学びを全国の学校現場で実現させるためのGIGAスクール構想の実現に向けた取組が始まっている。こうした動きがあることを踏まえ、鳥取県として、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、特別支援学校におけるICT活用教育の取組や推進の在り方について、鳥取県が目指すべき方向性の確実な理解と対応に資する。

2 視聴期間

令和2年12月21日（月）から令和3年1月29日（金）まで

3 視聴者

1094名（小・中・義務教育学校、高等学校、特別支援学校の教職員、市町村（学校組合）教育委員会の行政関係者、幼稚園・保育所・認定こども園の保育者及び保育担当課の行政関係者）
（これまでの参加者数 R1：218名、H30：333名、H29：255名、H28：270名）

4 内容

（1）鳥取県教育委員会教育長あいさつ

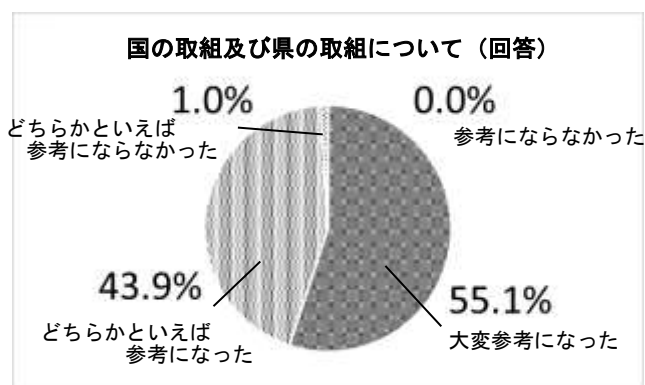
【挨拶】鳥取県教育委員会 山本 仁志 教育長

（2）説明「国の取組及び県の取組について」

＜テーマ＞「鳥取県のGIGAスクール構想の実現に向けて」〔鳥取県教育委員会作成資料〕

【説明者】鳥取県教育委員会事務局 教育環境課 横山 順一 参事

【概要】GIGAスクール構想の背景や鳥取県の現状と課題、新学習指導要領に示された情報教育・ICT活用教育、「1人1台端末・高速通信環境」がもたらす学びの変容、鳥取県が目指す方向性等について説明した。県として、小中高それぞれの発達段階に応じた情報活用能力の接続イメージを意識した12年間を見据えた取組を計画していることや、教員と子どもたちが共通の学習用ツールを使うことが、子どもたちの学習の連続性や教員の働き方改革にもつながることについて説明を行った。



【視聴者の感想】

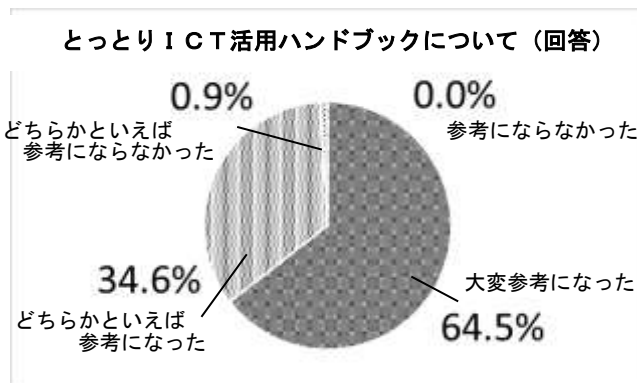
- ・教師として適切に使わないといけないプレッシャーはあるが、1人1台端末は児童生徒個々の探究力を高めることが期待できると感じた。
- ・ICT活用は今後の課題と感じていたが、独学では限外を感じていた。鳥取県が重要視して取り組んでいると知り、ICT活用を深く学び、実践できる環境ができて、より研究に向けて、意欲がわいてきた。
- ・次代を見据えた各校種における継続的指導の重要性を感じた。
- ・GIGAスクール構想の目的、学習指導要領での位置付け、コロナ禍での学びの保障など理解が深まった。
- ・鳥取県は全国的にICTの環境整備が進んでいるが、教員の指導力の向上が課題だと思った。

(3) 説明「とっとりICT活用ハンドブックについて」

＜テーマ＞「令和2年度版 とっとりICT活用ハンドブックの使い方」〔鳥取県教育委員会作成資料〕

【説明者】鳥取県教育センター 教育企画研修課 岩崎 有朋 係長

【概要】令和2年12月に作成した「とっとりICT活用ハンドブック」は、国の施策の方向性や鳥取県の学びの未来像を示した「理論編」と、より具体的に日常でどのようにICT活用を進めていくのかといったことを示した「実践編」で構成されていることを確認した。1人1台端末が整備されることに伴い、鳥取県教育委員会が以前より示している「とっとりの授業改革【10の視点】」にICT活用を関連付け、授業改善につながるよう、学校での活用方法を例示し解説した。



【視聴者の感想】

- ・提示用としてタブレットを使うことはあるが、個別学習や協働学習ではまだまだ活用できていないので、活用事例等を参考にしながら進んで取り組みたいと思った。
- ・感染症の拡大も懸念される今こそ、校内のチームで活用イメージの実践ができるように授業改善の研修を行い、教員のスキルを向上させる道標として、「とっとりICT活用ハンドブック」を活用していきたい。
- ・自分のスキルのセルフチェックがあり、できていないことがよくわかった。全職員も把握できたと思うので、情報主任やICTに堪能な先生と協力しながら、学校全体でスキルアップを図りたい。
- ・中学校区での学びが高校での学びにつながる。全県で、目指す姿を共有することはとても意義があると考える。このハンドブックを有効活用し、子どもたちの豊かな学びにつなげていきたい。

(4) 講演・演習

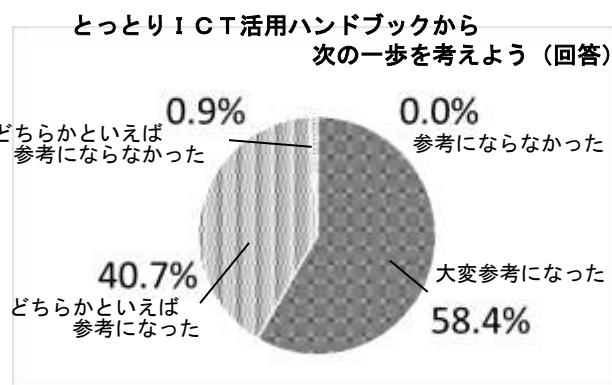
＜テーマ＞「とっとりICT活用ハンドブックから次の一歩を考えよう」



【講師】東北学院大学文学部 教育学科 稲垣 忠 教授 (鳥取県情報教育アドバイザー)

【概要】GIGAスクール構想の実現で目指すのは、誰一人取り残すことのない公正に個別最適化された創造性を育む学びであり、「日常」「学び」「授業」の3つの視点から変革を起こしていく必要があることを御教授いただいた。1人1台端末による教育現場の変革をイメージしながら、子どもたちに情報活用能力を身につけさせ、それがどのような学びをもたらすのかをわかりやすく説明いただいた。鳥取の学校現場でもすぐに実践できるように、他県の

好実践事例を映像で紹介いただいた。さらに、「とっとりICT活用ハンドブック」の有効活用できる点等を具体的に解説された。最後に、GIGAスクール構想の今後の検討課題についての国の動向を説明いただき、「令和の日本型学校教育」の構築を目指していく必要があることをご示唆いただいた。



【視聴者の感想】

- ・インターネットなどで得た情報を活用して新たな知見を得たり、集計ソフト（Google フォーム）などを使ってまとめたりと、ICT教育の幅広さを知ることができた。どのように自分が実践していけるか、今後さらに研修を積んでいく必要があると感じる。
- ・演習「1人1台端末による日常のDXをイメージしよう」の中で、デジタルに頼るところと、アナログで継続していかなければならないところといった日常の変化を整理することで、今後のICT活用を考えていける機会になった。
- ・環境を整えば、いままでのICTを使ったものが一方向ではなく双方向のモデルとなった学習に変わる。子どもたちにとって、ゲームとしてしか使わなかったタブレットが学習に変わる機会であると考ええる。
- ・使うことから活用することへの流れについて説明があり、わかりやすかった。到達する目標は使うことが目標ではなく、学習の手段として定着していくことが大切であることが理解できた。そのためには、学習に対する教職員の意識改革が必要となってくる。研修などで深めていく部分であると考えている。

※DX（デジタル・トランスフォーメーション）とは、「デジタル技術によって変革を起こすこと」

5 本研究大会全般についての視聴者の感想

- ・GIGAスクール構想に対する鳥取県としての覚悟と熱意を感じた。その具体的な実践例、導入例の積み重ねの一つとなれるよう、自分の学校でも覚悟と熱意を持って、実践や他の教員を巻き込んだ研修、研究に尽力したい。
- ・ICT環境が整った後、学校現場での活用方法が具体的にイメージできた。引き続き研修を行い、子ども達へのよりよい学びが実現できるよう努力していきたいと思った。
- ・鳥取県内のGIGAスクール構想における立ち位置を知ることができたのでよかった。学びの変容や鳥取県が目指すところを意識しながら準備を進めていきたい。
- ・一人の子どもも取り残さないという学びの最適化に向けてICTを有効活用していきたい。
- ・この形態での研修は効果的。繰り返して視聴できるし、他職員への伝達にも有効である。また、研修会場に移動しなくてよいので受けやすい。GIGAスクールに関する研修の第2弾をお願いしたい。
- ・時間を調整して、動画を視聴できるので、よい試みだと思う。出張だと一人しか行けないが、このようにリモートであれば皆で共有でき、有意義であった。